

校長室通信

令和7年4月14日号
志免町立志免西小学校
高良 祐治

4月7日に始業式、10日に入学式を行い、1046名の子どもたちと共に令和7年度の志免西小学校の教育活動が本格的にスタートしました。子どもたちからは、新しい友だちや新しい先生と、新しい学年、学級で、「どんな楽しいことが待っているのだろうか？」と期待でいっぱいな様子が伝わってきます。こどもたちの期待に応えられるように職員一同取り組んで参ります。本年度も本校の教育活動にご理解とご協力よろしくお願ひします。

よさと課題は表裏一体

昨年4月に本校に着任し、1年間先生たちの指導の様子や子どもたちの様子を見てきて、色々考えることがありました。

本校の子どもたちはとても素直です。先生の指示はきちんと聞き、学習など様々な活動に熱心に取り組めます。一方で、子どもたちから「こんなことをやってみたい」「こうした方がもっといいのではないだろうか」というような、働きかけや挑戦するような姿はまだまだ少ないように感じます。

これは、2つの要因があるように思います。

1つは、新型コロナウイルス感染症による様々な活動の制約の影響です。感染流行時には、それまで学校で当たり前のようにできていたことが、できなくなりました。特に、「みんなで集まって」「頭を寄せ合い話し合って」といった活動は、全くできなくなり、全員が前を向き、先生の指示を聞きながらしずかに学習を進めることが当たり前になりました。

最近のようですが、学校が臨時休業となったのは、もう5年前のことです。この間に先生の若年化が進み、“コロナ前”の学校教育を知らない先生も増えました。子どもたちが粘っく考え、様々なことに挑戦することを見守る風土が教育現場に薄くなったように感じます。

もう1つは、大規模校故の指導の在り方にあると思っています。どうしても学級数が多くなると、「そろえる」ことを重視しがちです。もちろん学習や活動の「内容」や、「いつ」「いつまでに」行っかという「時間」をそろえることは大切ですが、そのことを重視してしまっかために、教師側が計画を作成し、先を見越して指示を出してしまっかがちです。

そろえることが“画一的”になってしまっか、指導する先生や子どもたちの個性が失われてしまっかしているのであれば、個性伸長を目指すべき学校教育として

は残念なことです。

子どもが挑戦したくなるように

私は、これだけたくさんの子どもたちがいる学校であれば、子どもたちが「ここはもっとこうした方がいいのではないか」「自分たちの力で、もっとこんなことをやってみたい」ということを発案し、周りの友だちや学校に提案し、話し合って計画をつくり、実際に活動したり取り組んでみたりしてみる場面が、もっとたくさん見られてもいいのではないかと考えています。

例えば、全校で長縄大会をしたいと考えた体育委員会の子どもが、委員会の中でルールなどの実施方法を検討し、代表委員会で全校に提案し、それを受けて広報委員会が全学級に広報したり、放送委員会が当日の様子を撮影して、給食時間に全校に紹介したり…。これは委員会活動での例を紹介しましたが、学級の係活動など、子どもが主体的に何かに挑戦できる場合は、工夫次第でいくらでもあると思います。

そして、このような活動が多く見られるようになってくれば、子どもたちにとっては、「自分たちの思いが実現できた」という自信になり、「自分たちの取り組みで学級や学校が良くなっかている」という実感を持たせることができます。さらに、このような姿が、どんどん学校中に広がっかいくことで、学校がとても楽しく、居心地の良い場所になっていくと思います。

そのためには、まずは我々教師が、「やってみないか」と働きかけることが必要ですし、安全面や内容面、時間などを考慮して支援することが必要です。そして何よりも、これまで教師が握っかっていた教育活動の主導権を、失敗を恐れず(覚悟の上)、子どもたちに渡す勇気を持つことが大切なのだと思っかいます。

今年度は、子どもたちが「やってみた！」がたくさん見られる志免西小になることを期待しています。